和と伴の花咲く街

荒井敦子

第七回

あなたにとっての人生の師匠は？　と問われると、迷うことなく私は、永六輔さんと答える。

私が26歳の9月1日、忘れもしないわが故郷大和郡山でのこと。地元の青年会議所（JC）の講演会に永さんが招かれ、アシスタントを捜されていた。当時ラジオにも出演していた私に白羽の矢が立ち、ピアノの弾き語りとおしゃべりで、永さんと舞台で御一緒させて頂いたのである。当時まだ40代の永さんは、おしゃれで粋。ラジオやテレビ、執筆家としても活躍中の文化人で、何よりも奈良という地に大変魅力を感じておられた。その永さんが私に一曲リクエストをして下さった。当時、映画音楽やミュージカルを歌っていた私は、「トライ・トゥ・リメンバー」という地味なミュージカルナンバーを選曲したにも関わらず、この歌（曲）が歌われる「ファンタスティックス」というミュージカルをよく御存知で、私のピアノ弾き語りを大層ほめて下さり、私は有頂天になった。終演後の懇親会が終わり、一泊され、翌日は東京に帰られると聞き、それまでの朝の時間に、何と私は、永さんをある古寺へのお参りにお誘いしたのである。どうして、そんな積極的なことが、26歳の私にできたのか、今もわからない。私自身、萩の花が美しい初秋の白毫寺のニュースを、前日にテレビで見ただけで、当時一度も行ったことのなかったお寺へお誘いするなんて！　なんという度胸であったのだろう！　今考えると赤面の至りである。永さんは、快くOKして下さり、ワクワクして翌朝お迎えにホテルに伺うと、それをきいてJCのおじ様たちも、当然ながらぞろぞろと付いて来られ、それはそれは賑やかなお寺参りとなった。そのことが心に残られたのか、白毫寺の素朴なかくれ古寺の風情をラジオでおっしゃって下さった。今は亡き宮崎快尭住職は後々まで、そのことを誇らしげに話しておられた。

それから、私と永さんの文通が始まった。夕陽の絵葉書を集めておられた永さんに、初めての一人旅を行ったオーストラリアのタスマニア島から絵葉書を出した。帰国すると、何とすでにお礼の葉書が届いていた。「タスマニアの夕陽をありがとう！」、この一行の御礼状の粋な一言の衝撃を今も忘れることができない。

まつぼっくり少年少女合唱団を結成した当時、私の自宅はできたばかりのJR大和郡山駅前ビルの一画にあった。その同じフロアの隣に小さなスタジオを作った時にも、永さんはそのこけら落としに駆けつけて下さった。たった50人のお客さまに、私の活動を応援していることを言って下さり、駅前ビルのお店一軒一軒に、私を連れての御挨拶に自ら行って下さった。「僕の友だちの荒井敦子さんが、この近くにスタジオを作りました。これからもどうぞよろしくお願いします」と、お寿司屋さんからカメラ屋さん、薬局まで…。今でもその時の驚きを語って下さる方もおられる。

お寿司屋さんの裏側を通って、スタジオの階段を登ろうとしたとき、入口に椎茸や高野豆腐の巻き寿司の材料が…。「こんな所を通ってもらい…」と、恥ずかしそうに言うと、永さんは意に介さず、「文化は、こういう所から生まれるんだよ！　東京の「銀巴里」でも、みんなこんな雑多な所から始まったんだ」と…。私は、永さんのこのお言葉が嬉しくて仕方がなかった。駅前のビルの小さなスタジオ、ここで誇りを持って活動できたのは、永さんのこの一言であった。

そして、その3ヶ月後に、何と中村八大さんを連れて「六八」コンビのコンサートをして下さった。八大先生のピアノで歌った「愛の讃歌」は、今もその時にときめいた感動が忘れられない素晴らしい演奏であった。生涯私の宝物である。来年は、「六八九」コンサートをここでしようね！　と約束して頂いたが、翌年、悲しいことに日航機事故で坂本九さんは還らぬ人となり、その夢は消えてしまったが、舞台で御一緒できる永さんとの御縁は、続いてゆくのである。奈良県下はもちろん、大阪や京都、そして三重県でも…。永さんと出逢えたこと、そしてその会話から、舞台から、たくさんの知識や知恵、そして感動

あらい　あつこ
奈良県大和郡山市生まれ。声楽家。日本音楽療法学会認定音楽療法士・監事。NPO法人音楽の森理事長。大阪音楽大学声楽科卒業後、放送・教育方面の職歴、難民キャンプや障がい者施設でのボランティア経験を生かし多彩な音楽活動を展開。まつぼっくり少年少女合唱団を結成し世界の都市での公演や合唱指導を通じた国際交流、また県下のわらべ歌採譜に尽力し、町と村の交流に努めている。1993年「サントリー地域文化賞」受賞。共著に『歌の力』（永六輔、荒井敦子著PHP研究所）。その他、創作ミュージカルや校歌等の作詞作曲作品多数。コロナ禍では、「森への贈り物」として寺社への音楽奉納を行い、2021年「ARTS for the future！」事業に採択された。

（題字）荒井敦子　協力：笹川文林堂 奈良市三条角振町

を吸収できることが嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。

中でも、十津川村置村１００年の時、以前から、「まつぼっくり」の御縁で親しくさせて頂いているこの村から、永さんをゲストに、そして私がアシスタントとして招かれた時、当時の玉置春雄村長が満面の笑顔で出迎えて下さった。ちょうどお昼に到着。昼食を大きな会議室で、村長はじめ教育長、議員さんたち…村の御歴々が幕の内弁当でおもてなし。すると永さんは、「この弁当箱の中に、十津川産はありますか？ 」この質問にお偉い方々はびっくり仰天！ 確かにフライやお造り、煮物…と随分立派で豪華な幕の内弁当の中には、どうやら十津川産のものはなかったようである。困ったはずの村長さんは、「食べてるわしらが十津川産ですわ！ アッハッハッハッ」と豪快な笑いにかえられた。村長さんのすごい機転に驚いた私であったが、実は永さんは、村長さんの第一印象がとても親しみの感じられる人物と思い、こんなことをあえておっしゃったのだと後になってわかった。食事前に、村長が置村１００年の記念品に、当時五千軒であったか？ 村民一軒ずつに、その村出身の若き陶芸家に依頼し、一枚ずつ彼の焼いたお皿を配る予定であるが、それを見事果たした暁には、この村で窯を作って彼を迎え入れようと思っていると話された。この素晴らしい村長の考えを聞いたことが、先の永さんのお言葉につながったようだ。そして永さんは、こんなことも言われた。「上等の弁当より、例えば、その陶芸家の作ったお皿に、村の名物の目はり寿司や柿の葉寿司をのせて出す方が、どれだけ遠方から来られた方にとって御馳走であることでしょう」と。さらにこんなことも。「まず初めて訪れた村や町の役場で迎えてくれる女性職員さん。お茶を出される時の笑顔とおもてなしの言葉で、その村がどんな村なのかわかりますよ！ 僕は、最初にお茶を出された女性が素敵だったのでこんなことを言わせてもらいました」と…全国各地行かないところはない程、たくさんの市町村で講演されている永さんだからこそ言える名言であった。

私は39才のとき、それまでのまつぼっくりのわらべうた活動や施設での音楽活動が評価され、多くの栄えある賞を頂き、まもなく奈良市の行政から抜擢され、奈良市音声館初代館長に就任。そして奈良市社会福祉協議会に音楽療法推進室が開設され室長に！ 全国初の音楽療法を行政が取り組む奈良市は一世を風靡する存在となり、音楽療法によるまちづくりを行政の扉をノックした私はなんと、その中心に置かれてしまった。これも、永さんに、自分が今活動している情熱をお便りに託し、そして永さんからの短いお葉書の言葉を道標に歩んできたおかげ、永さんが私の音楽人生に光を当てて下さったおかげであった。

「小さな会をするのなら、僕は喜んで参上！ 」という言葉。

町の力は文化に現れることを痛感させて頂いた。音声館のホールは定員90名、オフブロードウェイさながらの小さな館に、何度も訪れて下さった永さん。わらべうたフェスタでは、ならまちの６ヶ所の館で講演会を！全てそれぞれの館の趣旨に

ふさわしい、違った内容のお話、まさに夢のような一日であった。

「一人でも同じ人が客席にいると、僕は全く違う話をします」

これが、今も私自身のトークの原点になっているのだが、ときどき、違う内容を話しているつもりが、同じことをしゃべってしまっているときもある。永さんの教えが生きているはずなのに…。

永さんが私を育てて下さった。
思い出は山のようにある。愛する
奥様を失われたショックもあり、
パーキンソン病が進行する中、
車椅子で奈良に来て頂いたまつ
ぼっくりの30周年記念コンサート。
ゲストは、永さんからの紹介で
長年応援し続けて下さっている
高石ともやさん、北山修さん、
そして私の朝日放送時代からの
大先輩である道上洋三さん。その
メンバーが、毎年7月に行われていた宵々山コンサートに出演。
まつぼっくりは何とこのコンサートに二度も出演させて頂いた。
永さんが企画されているこの会は、祇園祭の前々日、八坂神社
から「をけら火」を会場にもらってきて、参加者一人一人の
ろうそくへ火が移されていく。この宵々山コンサートは２０１１
年7月10日の30回目のコンサートが最後となった。出演者、参加者が全員でろうそくの灯りを掲げながら、東北への想いを「上を向いて歩こう」に乗せた。その時の永さんの言葉「記録よりも記憶に残して下さい」当時の感動が今も甦ってくる。祈りと音楽… まさに今の私の活動に重なっているのである。祭りを神事として取り入れたこの演出に、音楽と神社仏閣との繋がりを学ばせてもらった。

わが創作ミュージカル「良弁杉」を音声館時代作ったのも、地元に根づいた物語を舞台にすることの大事さを自然に永さんから学んでいたからかもしれない。幼い頃、母や祖母に連れられてお参りに行っていた東大寺二月堂の下にある大杉、そこでいつも母は、良弁さんの物語を私によくきかせてくれた。

「この杉のてっぺんに、鷲がさらってきた赤ちゃんが落とされ、お父さんもお母さんもないのに、その子はお経を一生懸命学んで、偉いお坊さんになって東大寺をつくらはってんでー！」

歌舞伎や文楽になっているこの物語を、当時誰も知らなくなっていることに嘆き、ミュージカルにして、子どもたちに町の人たちにこの東大寺の物語を伝えたい！という深い気持ち

から一般公募をして劇団員を募り、演出家に高木宏先生を迎えて劇団を立ち上げた。こうして音声館を拠点に練習と上演を行ってから早や29年、１１６回という上演回数を重ねた。脚本は、当時の音声館スタッフが中心となり、曲は私が作詞作曲。中でも「南無観」は、二月堂修二会のお水取りの有名な声明をモチーフに作曲し、永さんにも随分気に入って頂き、永さんの番組で全国に放送して頂いた。その事がきっかけともなり、奈良の音を歌に、合唱曲にしたい！という気持ちが高くなり、お声明に関心をもちつつ音楽活動をしている私に、３年前この『EURO-NARASIA Q』の連載のお話を頂いた。そしてそのお陰で、私が続けてきた奈良へのこだわり、日本の伝統音楽と西洋音楽のコラボをいつも夢見ている私が、今感じていることを、こうして活字にできているのである。

「奈良のわらべうたを大切に採譜し、広めているあっこちゃんだから、あなたの音楽療法活動も応援するよ！」とおっしゃって下さり、日本音楽療法学会の前身である日本臨床音楽療法協会の全国大会が１９９８年奈良で行われ、そのゲストとして永さんをお迎えできたことは、本当に名誉なことであった。そして永さんは、「明日咲くつぼみに」を作詞され、三波春夫さんがその歌をレコーディング。その後、歴史家でもある三波さんを応援され、あの長寿番組の「遠くへ行きたい」で奈良を訪問。当時執筆されていた聖徳太子の足跡を辿っての番組作りで、私は旅の案内人をさせて頂いた。「奈良は、あなたにまかせたら間違いないね。」なんて言われたら俄然張り切る私であった。

法隆寺や岡寺…、太子ゆかりのお寺への交渉も喜んでさせて頂いたことが懐かしい。

その後も、「題名のない音楽会」で、司会の黛敏郎さんが亡くなった後の一年間、永さんが司会をされていた頃、三波さんとまつぼっくりで「明日咲くつぼみに」を舞台で歌うため、子どもたちと日帰りで上京。生涯の宝となる体験である。

さて、永さんとの思い出話を書き進めてきたが、この原稿を書いている今日は、戦後78年目の６月23日「沖縄慰霊の日」。永さんと沖縄について書けることの意味を深く感じる。

音楽療法を本格的に行政で取り組み始めた頃、永さんが私に伝えて下さった思いは、「沖縄を知らずして、音楽療法を語るなかれ」であった。奈良市社会福祉協議会に音楽療法推進室を開設して間もない頃、永さんが毎月訪れておられた沖縄の、３月４日「三線（さんしん）の日」に、音声館と音楽療法の職員３人で御一緒させて頂いた。以前から「沖縄ジァンジァン」での出演など、沖縄の方々に寄り添っての活躍ぶりを、本土の舞台で聴かせてもらうたびに、沖縄への関心が深まっていた私だったので、喜び勇んだ沖縄への初めての旅だった。琉球放送での永さんの生放送にゲストとして迎えてもらい、奈良の音楽療法とわらべうたのことを語らせて頂いた。また宜野湾市におられる永さんのお友だち佐喜眞道夫館長の佐喜眞美術館を訪れ、『沖縄戦の図』を拝見、その悲惨な情景を描いた作品に言葉も出なかった。ちょうどその美術館は、普天間基地の返還地にあり、戦後の沖縄の立場の中で、佐喜眞家の御先祖の墓地もその中にあり、大変複雑な苦しい窮状を知った。

沖縄の町には、至る所で三線の音色が聴こえてきて、民謡教室も多く、初めて着いた那覇空港から乗ったタクシーの運転手さんはサイドブレーキの横に三線を置き、途中赤信号の所で、自慢の民謡を三線の弾き語りで披露、青になって演奏が止まると、こちらも物足りず、横丁に入ってじっくり聴かせてもらえるようにリクエストを！　お陰でメーターを入れるのを忘れた、と、自分の歌を聴いてくれて嬉しかったのでと無料のサービス。その感動をラジオの生放送で、運転者さんの名前も言って感謝の言葉を！するとまたまた放送局まで迎えに来て下さり、帰りはホテルまで送って下さった。このときはもちろん、メーター通りの支払をさせてもらった。楽しい思い出である。

ところで、三線の棹は黒檀でできていて、沖縄では昔、子どもが生まれると黒檀の苗を植えて、その子が成人したら、その木を切って三線にしてプレゼントする！　この素敵な沖縄の子育ても、永さんから教えてもらった。

そして沖縄の歴史を知る上でとても重要なひとつである「カンカラ三線」沖縄島民の四人に一人は命を落とした第二次世界大戦。その苦しみの中でも、歌や踊りを忘れず、大切に歌い継いできた沖縄民謡。戦時中、アメリカの統治下の沖縄で、米軍から支給される粉ミルクや食料の缶を胴に、落下傘のヒモを弦にして組み立てられたカンカラ三線。沖縄の方々の血のにじむ悲惨な時代にも、人知れず絶えることなく伝えられてきた沖縄民謡には、今本土でなくなってしまうふるさとの心が、しっかり息づいていることを、現地に足を運んで痛感したのであった。奈良市音声館で、全国初のわらべうた活動を本格的に始めた私には、目からうろこで、沖縄を知ることこそ、日本を知ること！　音楽の原点を知ること！　と、永さん亡き後も、音楽の森活動として、多くの方々とともに何度も訪れている沖縄。私にできることは、多くの命が眠る沖縄の海に向かって♫ふるさとの歌を歌い、今の日本の平和への犠牲になって

下さった方々へ、感謝の気持ちを伝えることだと思っている。

沖縄の歌や踊りは、とても明るい曲が多い。苦しみや悲しみが深ければ深い程、先祖から歌い継がれてきた歌や踊りに力をもらい、生きる活力にしていく沖縄の人々の魂こそ、永さんが伝えたいことだったのかもしれない。

7月7日は永さんのご命日。七夕の日に、愛する昌子夫人の元に旅立たれた。永さんと昌子さんは、彦星と織姫！ 昭和35年に永さんが作られた名曲「見上げてごらん夜の星を」は、七夕の夜のお二人のために作られたように感じられる。令和5年5月、ご命日に先立って、私は音楽療法のお仲間と、浅草の最尊寺に永さんのお墓参りをさせて頂いた。その浄土真宗のお寺は永さんの御実家。晩年は、長女の千絵さんの夫、良明さんがマネージャーとなってお世話をされ、そのお陰で奈良でのコンサートにも車椅子姿の永さんをお連れ頂いたことは、今も感謝感謝である。長年の念願であったお墓参りにもお寺に御案内下さった。「上を向いて歩こう」の歌詞が刻まれた永さんのお墓は他の墓石より低い。これは、永さんがいつもみんなを見下ろすのでなく、低い所から、私たちを世の中を見ていますよ！ という意味だと良明さんから伺った。そして私たちは、小さな声でこの歌を歌い、今日こうして活動できることへの感謝を永さんに伝えた。墓地を出た瞬間、何とも不思議なことが！

何と、昨年突然旅立った私の大切な愛犬と同じ珍しい犬種のキャバリアの4ヶ月の子犬が、近所の方の散歩で劇的に出会い、私は飼い主さんのお許しを得て、私に向かって走ってきたその子を涙で抱きしめた。まさに、永さんからもらったお墓参りのご褒美であった。

永さんからの多くの教えは、今も私の心の中に生き続け、歌となって、多くの方々に伝えることができる。「上を向いて歩こう」は古くからの友人であるインド人のマルカス氏により翻訳され、ヒンディー語で歌い、彼のお世話で、インドのたくさんの学校で日印の交流をさせていただいている。

7月に、久々に訪れるオーストラシアでは、オノ・ヨーコさんの英詞化で、日豪の架け橋をかけに行く。「スキヤキソング」で世界でも有名になったこの曲が、素晴らしい歌詞であること、日本の歴史の中で、この歌が大きな日本人の心の支えになってきたことを、私はしっかりと伝えてゆきたい。

（了）

書：裏出啓子